

Joris Vorstius — Siegfried Joost

GRUNDZÜGE DER BIBLIOTHEKSGESCHICHTE

図書館史要説

ヨリス・フォルシュティウス／ジークフリート・ヨースト 著

藤野幸雄 訳



日外アソシエーツ

ヨリス・フォルシュティウス ジークフリート・ヨースト

図書館史要説

新訂増補第7版

藤野幸雄訳

日外アソシエーツ

藤野幸雄（ふじの・ゆきお） 1931年群馬県生れ。1955年東京外国語大学ロシア語科卒。現在、図書館情報大学教授。著書『大英博物館』（岩波書店）『国立国会図書館』（教育社）、訳書、シェラ著『図書館の社会学的基盤』（日本図書館協会）等。

フォルシュティウス——ヨースト

図書館史要説

1980年5月7日 初版第1刷発行 ¥2,300

訳者 藤野幸雄

発行者 大高利夫

発行所 日外アソシエーツ株式会社

〒143 東京都大田区大森北1-23-8 第3下川ビル
振替 東京0-47971 電話 (03) 763-5241 (代)

発売元 株式会社 紀伊國屋書店

〒160-91 東京都新宿区新宿3-17-7
振替 東京9-125575 電話 (03) 354-0131 (代)

© Yukio Fujino

Printed in Japan, 1980

印刷・製本 恒進社 乱丁・替丁本はお取り替えいたします。

ISBN 4-8169-0001-2

第六版へのまえがき

わたしの尊敬する教師であり、図書館長をもって引退しておられたフォルシュティウス博士は一九六四年二月二日、ベルリンで亡くなられた。博士の『図書館史要説』は、一九三五年の初版出版以来、図書および図書館学の文献では指標としてそれ以後の世代にいつも使われたばかりでなく、信頼され、愛されてきた本となっている。ハラソヴィッツ出版社も、本書がさらに新しい版で再び出版されるべきであるとの正当な判断を下した。本版は原著者自身が数多くの訂正と増補を書きこんでいた自家原本を基本としてとっている。ただし新たなあらゆる研究の成果とそれに伴う展開は考慮に入れ、最新の研究に基づいた年号、数字の手直しは行なわねばならなかったし、十九・二十世紀の章は大幅に書き改めねばならなかった。

一九六五年五月、ハイデルベルクにて

S・ヨースト

第七版へのまえがき

数多の版を重ねる図書館学関係の文献は比較的稀である。本書が何十年にもわたって存在しえたのは、豊かにして多様な材料のうち本質にかかわるところに意識的に限定し、これを簡潔に叙述したからである。第七版において、今世紀の図書館史は新たに書き直さざるをえなかったけれども、こうした個有の性格はやはりそのまま保つよう努めた。第十二、十三、十六章には修正が加えられており、第十四、十五章には追補がなされている。ソ連とその勢力範囲にある人民民主主義諸国の図書館制度には特別に一章をあてることにした。一九一七年および一九四五年から進行している伝統との断絶にはきわめて深いものがあり、一つの現代史として扱うことができないほどだからである。そしてこの点では、それぞれの国で行なわれてきた発展の様相にけちをつけてみたり、明らかな退化の要素を否定したりする意図はわたしにはまったくなかった。

一九七七年八月、ベルリンにて

S・ヨースト

目次

まえがき i

序章

一章

古代の図書館

I 古代オリエントの図書館 3

II ギリシア・ローマ図書館史の典拠 4

III ギリシアの図書館事情 5

IV ローマの図書館事情 8

V 古代の図書館施設 9

二章

キリスト教初期、中世初期の図書館（紀元七六八年まで）

I 総論 10

II コンスタンティヌス一世以前のキリスト教図書館 10

III 地中海東部のビザンチン図書館、一四五三年まで 12

IV 中世初期西欧の図書館 13

19

3

1

第三章 中世の図書館（七六八—一二〇〇年）……………16

I 総論 16

II 九世紀および十世紀 17

III 十一世紀および十二世紀 20

IV 中世の図書館施設 23

第四章 中世後期の図書館（十三・十四世紀）……………25

I 総論 25

II 修道院図書館の命運 26

III 君侯図書館 27

IV 初期の大学図書館 27

V その他の図書館 29

VI 中世図書館のまとめ 30

第五章 人文主義時代の図書館（二四〇〇—一五二〇年）……………31

I 近世図書館史の序論 31

II 人文主義の本質とその影響 31

III 人文主義時代のイタリア図書館 33

六章

IV	ドイツ人文主義期の図書館	35
V	図書の変貌	36
VI	十五世紀の修道院・教会図書館	36
VII	大学図書館の発達	37
VIII	都市の蔵書コレクション	38
IX	王侯その他の個人図書館	39
十六世紀ドイツの図書館（一五二〇—一六一八年）		41

七章

I	総論	50
II	都市図書館	42
III	教会および学校図書館	43
IV	大学図書館	44
V	地方領主の図書館	46
VI	個人図書館	48
VII	まとめ	49
十六・十七世紀ヨーロッパ諸国の図書館（一五二〇—一七〇〇年）		50

八章

十七世紀ドイツの図書館（一六一八—一七〇〇年）

I 総論 62

II 王侯領主の図書館 63

III 大学図書館 65

IV 教会および学校図書館 66

V 都市図書館と私有コレクション 66

VI 十六・十七世紀図書館のまとめ 67

九章

十八世紀の図書館（一七〇〇—一七八九年）

I 総論 68

II フランスの図書館 69

III イギリスの図書館 70

IV イタリアの図書館 72

V ドイツの図書館 73

VI その他の諸国 86

十章 フランス革命と反動期の図書館（一七八九—一八七〇年）……………

89

I 総論 89

II フランスの図書館 90

III ドイツの図書館 92

IV イギリスの図書館 107

V その他の諸国 109

十一章 一八七〇年以後の近代的実用図書館の形成……………

115

I 序論 115

II 近代の図書館建築 116

III 近代図書館の図書館員 119

IV 図書の収集と排架 120

V 目録の発達 121

VI 利用および貸出サービス 122

十二章 ドイツ図書館史（一八七〇—一九四五年）…………… 123

I 総論 123

II 発展の概略 124

III 共同図書館計画 126

IV ベルリンの王立図書館（国立図書館）一八八四年以降 127

V その他の図書館 129

十三章 世界の図書館（一八七〇—一九四五年）…………… 137

I イギリスの図書館 137

II フランスの図書館 142

III イタリアの図書館 144

IV スイスの図書館 146

V オーストリアの図書館 148

VI ベルギー、オランダの図書館 149

VII スペイン、ポルトガルの図書館 150

VIII スカンジナヴィアの図書館 150

IX 東ヨーロッパの図書館 151

十四章 一九四五年以降の図書館史

I ヨーロッパ

1 ドイツ連邦共和国 159

2 イギリス 182

3 フランス 186

4 ベネルクス三国 189

5 イタリア 190

6 スペイン、ポルトガル 191

7 スイス 192

8 オーストリア 193

9 スカンジナビア諸国 194

II アメリカ

1 アメリカ合衆国 197

X アジアの図書館 153

XI アメリカ合衆国の図書館 154

XII 他のアメリカ諸国 157

XIII アフリカとオーストラリア 157

.....

2 カナダ 199

3 ラテン・アメリカ 200

III 近東とアフリカ 201

IV オーストラリア 205

V アジア 206

十五章 ソヴェト圏における図書館制度

I 総論 208

II ソヴェト社会主義共和国連邦 211

III ドイツ民主共和国 215

IV ポーランド人民共和国 221

V チェコスロヴァキア社会主義共和国 223

VI ルーマニア社会主義共和国 223

VII ブルガリア人民共和国 224

VIII ハンガリー人民共和国 225

十六章 国際的図書館協力の展開

解説とあとがき

索引

序章

1 図書館とは何か

図書館とは文献著作の集成が大多数あるいは限定されたグループの利用に供されるところ、として理解されている。こうした目的にそつた上で、教養図書館、主題図書館、総合学術図書館が区別される。図書館の文化的使命はまず第一に、著作物の収集保存にある、すなわち継承の糸が決してとぎれないようにしておく責任があり、「人間精神の宝の部屋」(ライブニッツ)となることである。そして第二に、著作物を整理して置き、有効な処理によってこれを開陳するところである。これにより図書館は人類のより高度な発展に役立っている。図書館の機能は、すべての国の価値ある図書をあらゆる立場の読者に読めるようにしておくことである。こうしたやり方により、図書館は自然に、国家の束縛やある立場またはある人種の偏見にたいする砦となりうる。図書館はドクトリンを教えている。

2 文明の歩みのなかの図書館

図書館は実際にかかなり遅れて文化史に現われている。その登場は、さらに大きな条件で、さらに長い文化的発展をとげてきた次の事項に関連して行なわれている。(a)文字言語の形成。文字は人間の真の記念碑である。その発生は紀元前四千年あるいは三千年のエジプト、バビロニア、中国にたどることが

でき、セム人種が作り上げた字母書法にその最高の結晶を見出しうる。(b)文学の発展が、口承の伝統を成立たなくするまでに拡げられたこと。(c)文学教養人の社会層が形成され、この人たちのために図書の収集が必要となったこと。以上三つの前提が起って始めて図書館が出現しえたのである。

3 図書館史の区分

(a)文化圏による。図書館史は文化史の一部分であり、文化史に応じて次のごとく分けられよう。(1)中近東文化圏の図書館、(2)西ヨーロッパ文化圏の図書館、(3)イスラム文化圏の図書館、(4)インド文化圏の図書館、(5)中国文化圏の図書館。——(b)文献遺産の姿および書写材料による区分。(1)パピロニアの粘土板図書館、(2)パピルス卷子本で成立っていたエジプトおよびギリシア古代の図書館、(3)羊皮紙や紙の古写本で成立つ中世の図書館(四—十五世紀)、(4)十五世紀以降の印刷図書の図書館。

一章 古代の図書館

I 古代オリエントの図書館

1 エジプト

文化の土地エジプトはヒエログリフ文字の発明と普及、古代の書写用具としてこの地の多年生の草パピルスからほぼ独占的に作りだしたパピルス紙によって、そしてまた卷子本の完成によって、本の世界に大きな意義を有している。しかしながら古代のエジプトには形をなした図書館はなきに等しく、文化的価値ある文書の保存室とか、ささやかな所蔵がころうじて寺院に見られるだけであった。書庫を備えていたエジプトの地の図書館は一つだけあるが、これも古代エジプトのものとは言えなかった。エジプト最南の地のギリシア都市国家エドフーにプトレマイオス王朝時代に建てられたホルスの神殿の文書庫である。

2 アッシリア・バビロニアの図書館

古代オリエントの書物は小型粘土板の形態をとっており、ここにくさび形のとがった尖筆で文字（楔形文字）がほりつけられて、板はその後太陽にあてるか火で焼いて固められていた。チグリス河ユーフラテス河の流域の地にあった最も古い図書館の一つは焼いてない楔形文字板を所蔵しており、こ

こは一八八九年から一九〇〇年にかけてアメリカ人J・P・ピータースおよびH・V・ヒルブレヒトによりユーフラテス河に沿った村落ニップール(現在のヌファール)で発掘された時、その地層は三千年をさかのぼれるものであった。アッシリアの図書館で詳細に知られているのは、ニネヴェのアッシルバニパル王(紀元前六二六年没)の有名な粘土板図書館で、これは一八四五―五四四年の間、A・H・レイヤードとH・ラッサムの手で発掘され、現在大英博物館に収められている。この粘土板は、約二十四×十六センチの大きさのものである。この図書館の蔵書は公文書記録と、王の命令で復原されていた当時集められた限りのアッシリアの文献復刻集成から成っていた。ナボポラッサル王のニネヴェの征服(紀元前六〇六年)により、アッシリアの王国とともにアッシリアの図書館も最後の時を迎えている。

3 ヒッタイト王国 今世紀にいたり、フーゴ・ヴィンクラーおよびクルト・ビッテルにより小アジアのボアズキョイ、すなわち古代のハットウシャシュの地で行なわれた発掘は、古代のインド・ヨーロッパ系文明の一つ、ヒッタイト王国を発見したが、同時にそこでは十四世紀も続いたアッシリア王国図書館も発見されている。ヒッタイトの書物文化はまったくアッシリアに依存していた(楔形文字、粘土板)。

II ギリシア・ローマ図書館史の典拠

1 遺跡 図書館の痕跡はいくつか、発掘により見出されている。第一にあげるべきは、一八七八年にK・フリーマンにより発掘され、一八八四年A・コンゼが図書館の跡と認定したベルガモンの図書館、およびエフェソスにあったゲルス図書館(紀元二世紀のころ)であろう。後者は一九〇三―五年にオーストリア考古学研究所が発掘し